

トドマツ人工林における 保残伐施業の実証実験

北海道支所

森林生物研究グループ長 佐藤 重穂

森林総合研究所北海道支所では、人工林での木材生産と公益的機能の両立をめざす技術を作ることを目標にして、2013年度から北海道、北海道大学、北海道立総合研究機構林業試験場

と共同で、「トドマツ人工林における保残伐施業の実証実験」を実施しています。この実証実験では北海道芦別市とその周辺の道有林において、林齢が50年生以上のトドマツ人工林等に5〜8haの多数の実験区を配置して、すべての木を伐採する（皆伐）、単木で木を残す（単木保残）、まとめて木を残す（群状保残）等の異なる方法で伐採を行いました（図1）。単木保残では、人工林の中に自然に生え

てきた広葉樹を3段階の量で残すことで、広葉樹を必要とする生物の保全をめざします（図2）。これらの実験区では、植物、鳥類、昆虫等の生物多様性と、水土保持機能、木材生産性等を調べています。そして、保残方法や保残率の違いが及ぼす影響を明らかにして、伐採による負の影響を少なくする施業方法を検証しています。

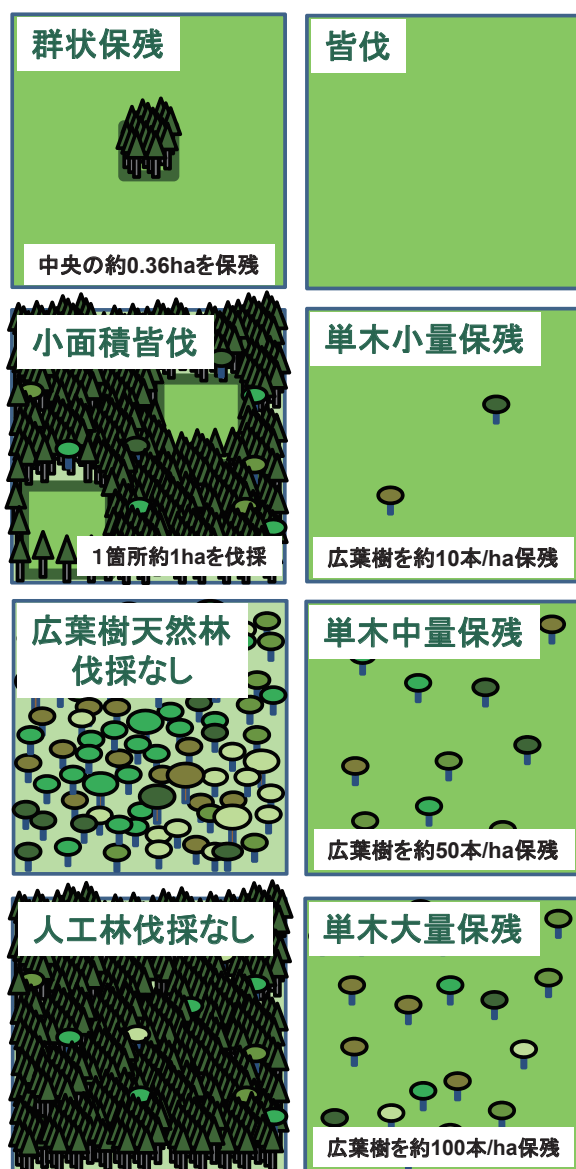


図1 保残伐実験の各実験区の処理方法

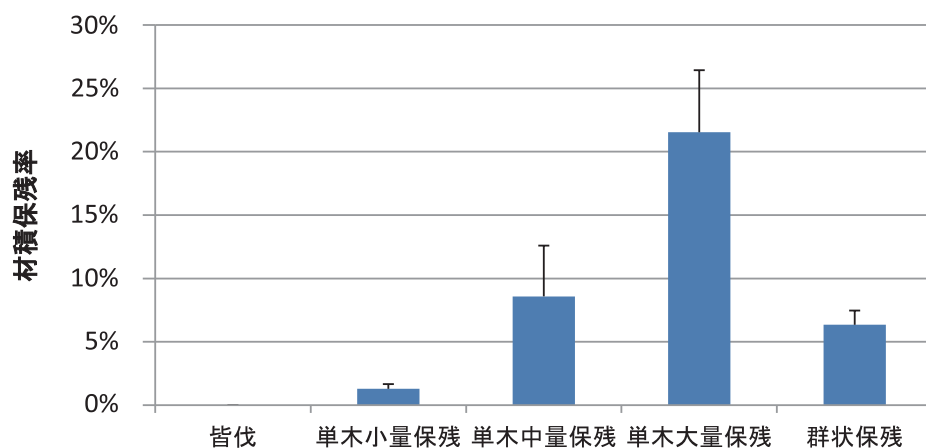


図2 保残伐実験区の各処理における材積保残率